

青梅市文化財ニュース

第451号

令和7年5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

「奥多摩」100年と青梅

青梅市在住の方が「奥多摩」と聞けば、隣の奥多摩町のことを思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、都心からJR青梅線で「奥多摩」へ向かう行楽客には、青梅駅で奥多摩行きに乗り換えると「奥多摩」の入口に來たと感じ、二俣尾駅を過ぎて奥沢橋梁を渡るところから「奥多摩」にやって來たと感じる人が多いようです(ここはまだ青梅市です)。それは、車窓からの風景が、溪谷の風景へと変化していくからですが、忘れないでほしいのは、青梅も「奥多摩」の一部だった時代もあったという事実です。

「奥多摩」という地名は今から100年前に生まれたものです。大正から昭和へと年号が替わる前年の1925年に、現在の観光協会にあたる「奥多摩川保勝会」が結成され、それが「奥多摩」のはじまりです。大正から昭和の初めの時期は、東京の大都市化にともなって大自然を求めて郊外へと向かう行楽客が増え、御嶽山への登山客なども増加していました。この流れをさらに太くし、地域の発展を図ろうとしたのが奥多摩川保勝会です。しかし、この時は行楽客を呼び寄せる大自然の風景地を表す名称はありませんでした。そこで保勝会結成の中心となった指田茂十郎(羽村)らは、林学者の本多静六に相談、本多の『奥の細道』の「奥」をつけたら…、との提案を受けて、この風景地を「奥多摩川」と名付け、保勝会の名前としたのです。

注意したいのは「奥多摩川」の範囲です。結成の年に保勝会は青梅鉄道と協同で『奥多摩川探勝案内』というリーフレットを出し、主なる景勝地を紹介していますが、「羽村及福生に於ける鮎の漁場」から始まって上流へと向かい「雲取山」まで触れ、さらに「秋川流域の景勝」も載せています。保勝会は西多摩郡全域を対象とし、「奥多摩川」にこの地の風景を代表させたのです。しかし、「川」が付いていては、多摩川流域をはずれる地域にとっても、川ではない山岳の風景地にとっても不都合です。のちに「川」は消え、「奥多摩」が独自の歩みを始めます。

1927年、東京日日新聞・大阪毎日新聞主催で「日本新八景」選定のイベントが行われました。これは風景地を山岳、溪谷、湖沼などの八つのジャンルに分けて、それぞれを代表する地を葉書投票により選ぶもので、奥多摩川保勝会では「奥多摩溪谷」で投票



「奥多摩川探勝案内」表紙
(個人蔵)

運動に取り組みました。残念ながら日本新八景には選ばれませんでした、「日本百景」に選定されました。この投票運動が連日、新聞報道された結果、「奥多摩」は多くの人に知られ、「日本百景」の「奥多摩」としてブランド化し、定着していくことになったのです。



奥多摩園（絵葉書・博物館蔵）

しかし、「日本新八景」選定イベントのさなかに、青梅鉄道の御嶽までの延長が認可され、青梅鉄道が御嶽周辺の観光開発に力を入れるようになったことから、青梅町は行楽客の通過地点となってしまう危惧が生まれました。そこで、青梅町と調布村の有志は、1928年、琴河原（鮎美橋の下流域）に遊園地を開設して行楽客の誘致をはかります。そして、遊園地を「奥多摩園」と名付け宣伝しました。「奥多摩」というブランドを利用して、青梅に行楽客を呼ぼうとしたのです。

同年、青梅町でも北方の永山公園を中心とした遊園地計画を立て青梅鉄道に対して協力を求めました。しかし、青梅鉄道は別会社「奥多摩振興株式会社」を設立し、御嶽周辺地やさらに上流の開発に力を入れ（奥多摩振興は御嶽駅近くに琴鶴楼という料亭を建てました）、その要請には応じませんでした。1930年に青梅町は琴平山東側への大グラウンド設置計画を立てますが、それは実現しませんでした。1933年、青梅町は「青梅遊覧林間道」（勝沼～琴平～北斗～檜台～宮ノ平）を開設、有志らが「青梅厚生会」を設立し行楽客誘致策を検討しています。その座談会では、日本百景当選の頃は「奥多摩のうちに青梅も含まれていたが最近除かれるようになった」との発言がなされています。

1934年、青梅鉄道は三田村、古里村、氷川村とともに奥多摩森林開発協会（はじめは「奥多摩観光会」名で結成予定でした）を組織してキャンプ場を増設し、鉄道省に要望して新宿から御嶽までの省線直通電車の運転も実現しました。さらなる「奥」の開発に力を入れたのです。しかし、この電車はノンストップで青梅は通過するものでした。そのため、青梅町長は「奥多摩ト言ヘバ多摩川ノ奥地ノミヲ指称スルモノト誤認シ当町方面ノ絶景地ヲ閑却」していると訴え、直通電車青梅駅停車の要望を出しています。

100年前に、青梅を含む西多摩全体の風景地を表す名称として生まれた「奥多摩」は、その重心がだんだん奥地へと移り、それに対して青梅が、青梅も「奥多摩」だと主張していた時代があったのです。青梅市内の多摩川に架かる橋に「奥多摩橋」「下奥多摩橋」があります。青梅が「奥多摩」だった時代の名残と言えるでしょう。（文責 梅田定宏）

<参考文献・資料>

『青梅鉄道のあゆみ』青梅市郷土博物館、2025年

『東京日日新聞』府下版

「青梅電気鉄道資料」（青梅市郷土博物館蔵）